

# 平成31年市町村広報コンクール審査票(市部)

○広報紙の名称「広報まえばし 12月15日号」

## 評価された点

### 【表紙】

- 子どもの写真を使い「おいでー」と呼び掛け、2ページ以降の特集に誘導するレイアウトも  
いいアイデア
- 写真が良い。「おいでー！」と両手を広げた女兒のポーズも表情も秀逸
- 大胆な写真と見出しで読者に読ませようという努力は評価できる
- 見出しと少女の表情がマッチしていて目を引く

### 【特集】

- 特集「私たちのまちなか」は力作。「にぎわったあの頃」を懐かしい写真で振り返り、市や民間のにぎわい再生に向けた取り組みを紹介している。ただ華やかだった昔を懐かしむだけではなく、新たな挑戦、新たな価値の創造を個性豊かな人たちに語らせることで、可能性を感じさせる紙面となった
- 戦後の前橋の賑わいを伝える歴史的な写真を集めた努力に敬意を表する。まちなかに再び賑わいを取り戻すために何が必要かを、さまざまな人々から意見を聞いている。さらに座談会で、各自の考えをクロスさせ、化学反応を起こそうとする姿勢も評価できる
- 13ページにおよぶ特集は読みごたえがある。余裕のあるレイアウトや大きな文字、多彩な色使いでとても読みやすい。歴史から現状、未来へとグラフや対談、豊富な取材量で中心商店街の課題について詳細に伝えた
- 歴史、現状、未来への取り組みと記事構成は概ね良い。説得力と論拠ある文章があればなお良かった。写真を効果的に使うレイアウトも良い
- 昔の写真などを多く使っている好企画。たくさんの人の声を拾おうという姿勢が見えて良い。またフルカラーで見やすい
- 古い写真についてはよく集められたものと感心した。読み物としても読み応えがある。さまざまな立場の市民を掲載している点も良い

### 【その他】

- 「いきいきまえばし人」「アーツ前橋館長日記」も読み物として良かった
- イベント情報からまちの出来事、暮らしの情報とごちゃごちゃしがちな記事をすっきりと読みやすくまとめている
- 洗練されているデザインとレイアウト。登場する市民も職員も、良い表情をとらえており、親しみが湧く
- 暮らし情報のインデックスもカラーで分けられ、探しやすい。ゴミ収集、アンケート調査、住友館長と、行政発信ものにも顔がわかる写真が付いているのが良い

# 平成31年市町村広報コンクール審査票(市部)

## ○広報紙の名称「広報みどり 12月号」

### 評価された点

#### 【表紙】

- 特集に呼応した表紙の写真(ナウマンゾウ)も目を引き、なんだか楽しそうだなあと期待を抱かせてくれる
- レイアウトが良い
- マンモス(特に牙)が非常にインパクトがあり、迫力があって良い。

#### 【特集】

- 「日本のあけぼの『岩宿』」は内容、構成ともしっかりしていた。遺跡が発掘されて来年で70年になる。市民に遺跡の価値を改めて知ってもらい、タイムリーな企画。概要を年表とともに紹介し、相澤忠洋に焦点を当て、遺跡に関わる市民を取り上げた。「岩宿人の生活」「タイムスリップ」とサイド記事もあり、読み応えがあった
- 日本にも旧石器時代があったことを初めて証明することになった岩宿遺跡を正面から取り上げ、郷土の財産を改めて市民に訴えた素晴らしい特集記事。発見からの経緯を表面的になぞるだけでなく、発見者の相澤忠洋の生涯に光を当てた評伝のような3本目の記事も、筆者の思い入れが伝わってきて良かった
- 11ページもあり大迫力で、編集者の力の入れ方が伝わってきて読もうという気にさせる。詳細な記述と写真で岩宿の発見から今後の展望を分かりやすく解説している
- 市民が知っておくべき遺産である企画内容を強く支持する。岩宿博物館の展示に相澤忠洋さんの記述が少ないと感じていたため、この特集で見開きで紹介されていたことに安堵した。岩宿遺跡発掘70年を迎えることをもっとアピールし、広くイベントも組んでもらいたい
- 岩宿遺跡、相澤忠洋の説明が詳しい。記念館長のインタビューは発掘に携わった人のインタビューまで取っていて良かった。今につながるまで書いていて良い

#### 【その他】

- 「あなたの声を聞かせてください」というページは、書き込んだ後に封書にできる工夫がされており、素晴らしい。ネット時代に取り残されそうなお年寄りたちの声を吸い上げるアイテムとしてアイデアを評価したい
- 落ち着いた色合いと適度に間をあけたレイアウト、適切な文字の大きさやフォントで読みやすい紙面になっている
- イベントガイドが横組みされることで変化があり、読みやすい。大間々高校写真部コーナーは、若者参加の良いアイデア。図書館のお勧め、シネマ案内は親切

# 平成31年市町村広報コンクール審査票(市部)

## ○広報紙の名称「広報あんなか 8月1日号」

### 評価された点

#### 【表紙】

●空間を生かしたづくりが心地よい

●背景を切り取って人物のみを活用する、という工夫がなされ、背景の白色ともマッチし、印象的な仕上がりとなっている。タイトルの「超高齢社会を迎えてわたしたちができること」と併せて目にするにより、「中身はどんなことが書いてあるのだろう」と、読者に思わせ、次ページを開かせることを促す秀逸な表紙だと思う。タイトル「わたしたちができること」の「わたしたち」を赤色にし、読者への訴えを強調している点と併せて、※印で「超高齢社会」の解説を掲載している点も良い

●何を読んでももらいたいかという主張が明快でレイアウトや文字も読みやすく非常によい

#### 【特集】

●「超高齢社会を迎えて」は切実で深刻なテーマ。表紙から5ページに渡って展開した。「わたしができること」「家族ができること」「地域ができること」と段階ごとに「できること」を見つめさせる、いい企画だ。「認知症チェックリスト」や認知症カフェの連絡先を入れたのは親切。写真もなかなかうまい

●記事の出来が素晴らしい。読者一人一人に語りかけているような「ですます」文体と、難しい言葉をできるだけ使わないで書くというスタイルが文章全体に柔らかさを出している。実際に高齢者の方々がタブレットを使ってみた場面を筆者が「再現」しているのも上手。何より、市内で認知症カフェを運営している三団体の会合に「取材」に出向いている。市民と一緒に、同じ目線でこの問題に取り組んでいこうという広報誌編集者の誠実な姿勢が伝わってくる。上から目線で、自治体のやろうとしている政策を「説くだけ」の広報誌が少なくない中、「わたしができること」「家族ができること」「地域ができること」という三つの軸に切り分けたのも素晴らしい。他の広報誌でも参考になるスタイルだと感じた

●読みごたえがある。認知症や介護という身近に迫る問題を市民・地域とともに考えようという企画。行政側からでなく、市民・地域目線で書かれた記事は読者の関心を引くと思う

●リードが短く的確なメッセージを発している。わたし、家族、地域という分類も納得できる

#### 【その他】

●「地域おこし協力隊 活動報告」や「学習の森だより」などの連載は固定ファンがつきそうなので、ぜひ粘り強く進めてほしい

●誠実なづくり。できるだけ多くの情報を届けようという意欲を感じる。相談案内一覧は親切。休館案内、給水管修理担当の一覧などは、かゆいところに手が届いている

●企画はカラー、情報は2色と軽重をつけているところは分かりやすく良い